成田の未来を考える

吉田 悦郎 さん（71）

集団移転は時間かかる問題

昨年の水害は、72年間住んできて未だかつて見たことがない光景でした。高台から様子を見ていましたが、堤防が決壊して流れ込んだ水が阿武隈川の本流とは別の川を形成しており、「これは本当の水害だ」と思いました。

現在、決壊した堤防は仮復旧が終わり本復旧工事が進められていると聞きますが、内側の補強までやってもらわなければ、次に越水した時には終わりだと思っています。国にはまず最初にしっかりとした堤防を作ってもらい、川底を下げる工事や、川の増水を監視するライブカメラの設置も検討すべきだと思います。

高台への集団移転の話も出ていますが、これは国の保障ありきでの話です。「移転しなさい、でもお金は出せません」というのでは、集団移転など到底できません。さらに成田には家を建てて間もない人や、浸水した家屋の修繕を既に終えている人も多くいます。地域の意見が一つにまとまるには、まだまだ時間がかかると思います。

昨年の台風以降、夜になると2階に上がって、宿屋敷を眺めるようになりました。家々の灯りはまばらになりましたが、成田の人たちは過去も水害に遭い、その度に立ち上がってきました。地域の絆を守るため、今は地区共同の草刈りを計画しています。

台風を経験した身として伝えたいことは、自分の身は自分で守る覚悟が必要だということです。今はテレビもスマホもあります。災害情報に常に気を配り、的確な判断をしてほしいと思います。

添田 喜美代 さん（64）

また成田で暮らせるように

防災無線で避難の呼びかけを聞いても、しばらくは家にいました。これまでにも水害は経験していましたから、避難所で堤防決壊の報せを受けたときも「少し水が被るくらいだろう」と、深刻には受け止めていませんでした。

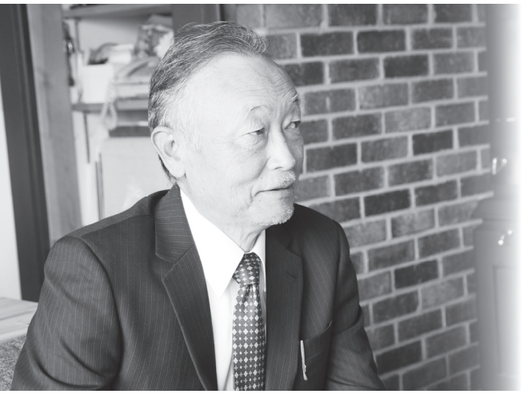
夜が明けて戻ると、変わり果てた姿の我が家が目に飛び込んできました。成田に嫁いで45年間住み続け、先祖代々受け継いできた家を守れなかったことに「申し訳ない」という思いでいっぱいでした。

台風の後、家の片付けは友人や親戚に手伝ってもらい、地区の住民やボランティアの方々には炊き出しなどの応援をいただきました。人の温かさが身に沁みるとともに、自分たちが被災しているにも関わらず助け合う地区住民の姿を見て、成田の団結力の強さを感じました。

家を失った私は成田から離れ、アパートに引っ越しました。慣れない地で生活を送る中、自然と成田に足が向くことがあります。成田に来ると心が落ち着き、人々は温かく出迎えてくれます。早くこの地に戻ってきたいと思いながら、日々を過ごしています。

専業農家の多い成田では、農機具が財産です。トラクターやコンバインは動かせますが、米の乾燥機は固定されており、水に浸かれば使い物にならなくなってしまいます。農家のために、高台へのライスセンター建設をお願いします。住民と町、県が一体となって国に思いを伝え、一刻も早い対応をしてもらいたいと思います。人々の幸せ、未来を守るために頑張りましょう。

成田で生きるために



前・成田行政区長
髙原 益資 さん（64）

堤防の強靭化を最優先して

水が襲ってくるスピードがあまりにも速過ぎて、信じられないという思いでした。誰もが「県道で止まるだろう」と安心していたと思います。今思い返すと、もっと早く避難の手伝いができていればと思うところはあります。

私自身、炊き出しの経験もなく、率先して作業に当たってくれた皆さんには本当に感謝しています。その陰で、暑さの中、手作業で道路の泥や稲わらの片付けを手伝ってくれた班長さんたちにも改めてお礼を述べたいと思います。

あの時は消防団、班長たちが一軒一軒家の戸を叩いて避難を呼びかけていましたが、中には水が来てもまだ家に残っている人もいました。避難の呼び掛けは、役場の防災無線だけでは限界があります。浸水の恐れがある場所は約80件しかないので、早い段階でピンポイントに各戸を回るなど、広報の仕方を考えなければならないと感じました。

成田地区の住民は少しでも雨が降ると不安になっています。今最優先すべきことは、堤防の強靭化に尽きると思います。ただ、国がいつまでにどこまでの改修をしてくれるのかが分かりません。堤防の問題は阿武隈川だけでなく、鈴川も含めて考えなければならないものだと思います。

国の計画が分からないと、若い人たちは成田の将来を不安に思います。遊水地の話にしても、計画次第で専業農家にとっては死活問題となります。町には、国や県に働きかけ、情報を早く住民に下ろしてくれることを望みます。

添田真助分団長㊧、添田薫副分団長㊨

鏡石町消防団 第五分団
添田 真助 分団長（37）
添田 薫 副分団長（36）

けが人も逃げ遅れもゼロへ

逃げ遅れた人がいないようにと必死で避難を呼びかけていたことが強く印象に残っています。堤防が決壊した時には県道付近にいましたが、真夜中だったため、水がすぐそこまで来ていることに気付きませんでした。川の方を照らせる照明などがあれば、もっと早く避難の呼び掛けができていたのでは、と思います。

私は実家が浸水被害に遭いました。成田地区では建てたばかりの家も浸水被害を受けていて、床下などを気にしながら住んでいる人もいると聞きます。復旧は進んでいますが、みんなが安心して住めるようになることがゴールなのかなと思います。

昨年の台風では、鏡石町では洪水等による死者こそいなかったものの、逃げ遅れた人がいました。昨年の経験を生かして、けが人ゼロ、逃げ遅れた人もゼロということを一番の目標に、地元消防団として活動していきたいです。

（添田真助分団長）

＊

私の家は被害を免れましたが、夜になって家の灯りが少なくなった成田地区を見ると「人がいなくなってしまったんだな」と実感します。

昨年の台風を経験して感じたことは、災害時には人手が必要だという事です。避難の呼び掛けも、自分たちだけでは手が回らなかった部分が多くあります。台風が来ると分かったら、他の分団にも早期に応援をお願いしたいと思います。（添田薫副分団長）